

■第7章－概説■

四天王寺は、実は1000年以上も天台宗（てんだいしゅう）の影響下にあり、11世紀以降は、当時流行していた天台浄土教や末法思想（まっぽうしそう）を背景にして、極楽浄土信仰の霊場として栄えました。

四天王寺と天台宗とのかかわりは、天台宗の根本経典が聖徳太子が広めた法華経（ほけきょう）であることや、中国天台宗の高僧が聖徳太子の生まれ変わりであるといった伝説などから、切っても切り離せないものでした。

815年に嵯峨（さが）天皇の皇后になった橘嘉智子（たちばなのかちこ）は、皇室庇護下の御願寺（ごがんじ）、現在の嵯峨嵐山にある檀林寺（だんりんじ）を創建したり、縁者を仏教修行のため中国に留学させたり、天台宗の高僧を日本に招来したりするなど、仏教信仰篤く積極的でした。

8世紀中頃に橘諸兄（たちばなのもろえ）が創建した井手寺（いででら）の塔院跡からは、平安時代の四天王寺と同範（どうはん）の軒瓦が出土します。

塔院の構築時期は、出土品から9世紀前半から中頃と考えられています。

橘嘉智子は、諸兄のひ孫にあたり、奈良麻呂の乱で政治の表舞台からすがたを消した橘氏再興に尽力した人物です。

当時権勢を誇った嘉智子によって井手寺が再建されたか、850年に亡くなった嘉智子の追善供養（ついでんくよう）のために塔が荘厳（しょうごん）されたものと考えられます。

井手寺と四天王寺の同範軒瓦は、嘉智子が自分の仏教活動のために、遣唐使船の発着に利用されていた難波津（なにわづ）を掌握する一環として、四天王寺を優遇した可能性を示唆しています。